

集団回想法的实践から捉えた高齢聴覚障害者の語りの質的变化

甲斐更紗¹

(¹ 立命館大学衣笠総合研究機構)

問題と目的

現代の日本は高齢社会を迎えている。高齢者たちにとって、それまでの生涯の全てを自分のものとして受け容れ、それを統合していく「自我の統合性」と、死への恐怖や望みを失った生活がもたらす「絶望」との拮抗のバランスを保ち、次の世代への関心を持つという発達課題がある（Erikson,1977）。

一般的に、聴覚障害者、特にろうあ者は手話を中心としたコミュニケーションのネットワークを持ち、その中で様々な情報や、心理的・社会的な支援を得ている。しかしながら多くの高齢聴覚障害者は、障害にばかり焦点化された教育を受けたことやコミュニケーションの困難さゆえに家族や社会に対して主体的に関わる事ができなかったため、肯定的な価値のもとに自分の人生を統合できないことが多い。そのため、Erikson(1977)の課題を達成することが高齢聴覚障害者にとっては易しい過程とはいえない。そのような問題を解決するために、何らかの手立てが必要である。それらは、彼らの過去の人生を現在の場でともに再体験する作業ともいえ、そうすることで彼ら自身の自己の統合と成長に向けての支援ができるかもしれない（鳥越,1999）。

高齢者の精神的ケアのひとつに回想法（Butler,1963 etc）がある。回想法は、高齢者がこれまでの人生を振り返ることを普遍的かつ適応的な動きをもつ行為とみなし、積極的に過去を回想して語るように促すことにより、様々な心理的効果を導き出す対人援助手段である。回想法によって、高齢者は自分自身について語ることができたりなど様々な効果がみられている。

そこで、老人福祉施設に入所している高齢聴覚障害者たちに集団回想法を取り入れた実践を試み、それらによる彼らの「語り」の質的变化および実践の効果を検討することを本研究の目的とする。

方法

A 県の老人福祉施設に入所する高齢聴覚障害者 8 名（男性 5 名、女性 3 名、70～90 代）を対象とし、集団回想法的实践を試みた。月に 1 回 60 分、計 12 回行った（201X 年 5 月から 201X+1 年 4 月）。

結果と考察

結果として、彼らの語りの分析から、彼らの手話言語やホームサインという特殊なコミュニケーションによって自己の語りが少しずつ構築されたことが明らかになった（Figure1）。当初は、お互いの顔を見ずに、定型化的エピソードや、繰り返し語られるなどが多くみられた。そのときの彼らは視線を合わせず、遠くを見ているような視線であったり、指差しの多用が多くみられた。そのうち、あるメンバーから「同じ内容ばかり」という発言が繰り返され、質問や返答という行為が生まれた。また、周りの反応によって、双方向的会話に変わった場面が増えてきた。また、視線を合わせ、相手の反応を確認するためにゆったりとした手話へと変わっていく場面がみられた。

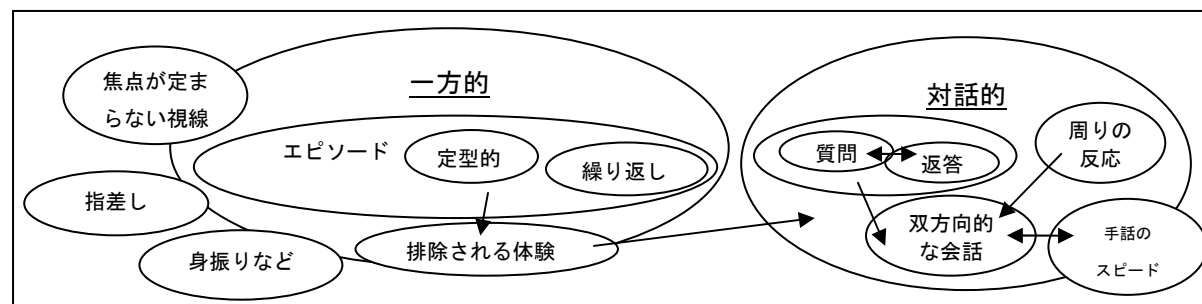


Figure1 高齢聴覚障害者の語りの変化

ホームサインをコミュニケーション手段として生活している B 氏は、標準的な手話を獲得しておらず、日常生活では身振りを主体としていた。また、参加している間は、「現在起きていること」についての話が多かった。集団回想法的实践の参加を通して、まずは他の参加者の語りを見ることがから始まり、それに対するコメントを発するようになり、回を重ねるごとに、過去の自身の語りの構築を試みるようになった。すでに人生の語りを持っている参加者も、他者の語りを聞くことにより、新たな視点からの語り直しが見られたことから、集団回想法的实践の効果があつたと考えられよう。